

第 28 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

本年度の審査の対象作品は、応募全作品の 8 点、建築作品発表会発表作品から 2 点、計 10 点とした。第 1 回審査会は全メンバー参加のもとで開催され、昨年の委員会の経緯・審査の視点について意見交換を行い、今年度の審査方針を確認した。その後、書類選考によって審査が開始され、審査委員の推挙作品と推挙の理由に関する討論を経て、現地審査の対象とすべき候補を 4 点に絞り込んだ。

応募作品からは小樽旅亭「蔵群」(中山眞琴／ナカヤマ・アーキテクト)、北海道工業大学新講義棟 G (佐藤孝／北海道工業大学、鈴木健夫／清水建設(株)北海道支社)、作品発表会からは、北海道立北方建築総合研究所(基本計画：北方建築総合研究所・アトリエブク、実施設計：北海道建設部建築整備室、中原・アトリエブク・柴滝)、日藤メモリアルガーデン(堀隆文・片瀬利行／(株)竹中工務店北海道支店一級建築士事務所)の 4 点であった。

しかし、新しい地平を切り開くような作品や新たな問題を投げかけようとしている建築、そして魅力的な建築観・デザイン観を秘めた建築が少なく、いずれも習作的あるいは主観的な形態操作に終始している作品が目につき、低調であったというのが審査員全員の実感であった。建築賞の審査・選考の視点は、「計画理論や設計・デザイン」に対しての「新しい挑戦・問題意識」、新しい人間・生活・環境の構築への意欲とビジョンに対する「ラディカルな追求」、加え、それらの「社会性」と「規範性」、を建築学会が優先させるべき価値とし、「新鮮、ラディカル、そして洗練への努力」であり、北海道建築賞の選考と審査の視座を明確にして進めた。また候補作品は全て複数の委員が現地審査を行うという原則も了承し、審査を開始した。3月11日、全ての候補作品の現地審査を完了し、最終選考の委員会を開催した。それぞれの建築について、建築作品の特徴と評価すべき内容、設計や計画のプログラムとコンセプト、デザイン性を支えている論理的な今日的な意味などについての議論が展開された。単なる機能性や空間性や形態などの表層的・恣意的な意匠や造形にとどまらず、それらを生み出した建築家の視座、プログラムや方法論、そしてその完成度や社会性などをめぐる意見が長時間にわたって交換され、委員の情緒や感性や好みに基づいた曖昧な議論ではなかった。

「北海道工業大学新講義棟 G」は、同大学の主たるキャンパス軸に隣接した、大学フレッシュマンの教育を行う総合講義棟であり、それゆえキャンパスランドスケープの構成上からの入念な配慮と建築計画上の配慮、そして外部・内部の相補性への配慮がほどこされた空間デザインが不可欠となる建築である。また、キャンパス内の施設は、オン・カリキュラム時に必要な

機能的空間構成とオフ・カリキュラム時に発生するキャンパスライフへの配慮とが同時に必要となり、それゆえ内外部の空間が連動した豊かさと魅力が求められる。

この新講義棟は従来の定式化された大学講義室と比べ建築内部と表層へのデザイン上の配慮と工夫が十二分にほどこされており、その試みは評価したい。しかし、キャンパス構成上の軸線／動線／諸室配置はオン・カリキュラム上の合理性よりもむしろ設計者の建築形態上の操作（特に中央吹抜け空間のデザイン）のための主観的な見解として理解せざるを得ない。それゆえに生じるキャンパス内にあるべき（オン・カリキュラムとオフ・カリキュラムの両方のキャンパス生活を包み込むべき）施設としての建築空間の緊張感、包容感の欠如、またキャンパス外部空間との断絶性が随所に見られ、審査員全員の合意で奨励賞とした。

「小樽旅亭・蔵群」は、オーナーのホスピタリティと設計者の建築手法のコラボレーションが創り出した建築であり、また現代数寄屋を志向する設計者のこれまでの集大成として理解し、その緻密な空間構成を高く評価した。しかし、表層的な仕上げ材等にその志向が集約しすぎ、その拘りが建築空間の豊かさをむしろ低減させていることが心残りであった。しかし北海道建築のひとつの方向性を強く求める空間構成手法を高く評価し、その継続的な展開と普遍化への努力を期待し、『素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法』として審査員特別賞として授賞の対象とした。

「北海道立北方建築総合研究所」は、基本計画の段階から、これまでの旧寒地建築研究所が蓄積された室内環境計画理論や新しい環境制御技法が随所に組み込まれ、果敢な建築化も試みられている。しかし本来重視されるべき研究環境（物理的環境ではなく社会的環境）への配慮には疑問も生じ、また本来は具体的なアクティビティを前提とすべき中央部のアトリウムも、環境計画上の合理性の説明はあったが、建築計画的な合理性、空間構成上の合理性とはミスマッチであり、総合的にバランスの取れた建築とは評価することが出来ず、また過大なアトリウムの活用のありかたも含めて大きな疑問が残り、審査員の合意によって対象からはずした。特に公共建築であるが故に求められる建築の総合的な合理性と質の水準設定への大きな疑問が審査員の中に残っている。

「日藤メモリアルガーデン」は大正初期の軟石倉庫の改修・再生計画・設計である。特に美術館併設店舗の計画設計は簡素な構成と原型の持つ構造美を極力生かそうとした手法は評価でき、外部空間の構成もヒューマンな町並み要素として再生されている。しかし、物販店舗・事務所棟では残念ながらこの手法を適用できず、歴史的建造物の再生・改修の水準から見ると評価できなかった。町並み再生を前提としたときには、2棟の改修計画設計と外構再構成のシ

ナジャイズが不可欠であると判断し、審査の対象からはずした。

北海道建築賞の選考基準が、「建築理論や設計・デザイン」に対し、「これからの北海道建築の地平を示唆しうる社会性と規範性」、「新しい挑戦・問題意識」加えて新たな人間・生活・環境の構築への意欲とビジョンに対する「合理と論理、ラディカル、そして洗練への努力」であることを再確認し、今年度は、北海道建築賞（本賞）は該当なしであることを確認して、本年度の建築賞審査委員会を解散した。

（文責：小林 英嗣）

第 28 回 北海道建築奨励賞

佐藤 孝 君 鈴木 健夫 君 「北海道工業大学新講義棟 G」の設計

この建物は札幌市にある工科系私立大学の講義棟である。歴史のある大学だけに、キャンパスには既に多くの建築群が配されている。近年の学科再編に伴い新しい教室を創る必要が生じ、大学は施設のエンドユーザーともなる同大建築工学科・佐藤孝教授を中心とする設計チームを編成、建物のプランニングとデザインを担わせた。

計画にあたりいくつかの建設地が候補になったと聞かすが、設計者は敢えて既存の図書館と学生食堂（HIT プラザ）の間にあった 1000 台を収容する駐車場を敷地に選んだ。この選択がその後の計画における可能性と、ある種の困難さをもたらしたことは想像に難くない。即ち、個性的な形態とボリュームをもつ図書館と食堂（いずれも設計は圓山彬雄氏）の間に、どのような形態にせよ新たな建物を配置した場合、既存の建物との間に否応なく空間的な関係が生じ、固有の性格をもつ外部空間が出現する。設計の過程では、対象となる建物の内部空間を創りつつ、二つの外部空間の質を同時に吟味しなくてはならなかった。しかし、パズルを解くようなこの課題に対し、作者は見事な解答を見出した。相対する教室ブロックの狭間に 6 度の平面的な傾きをもつ全階吹き抜けのアトリウムを抱き込ませることで、建物東側では対面する図書館に平行な壁が正門と主玄関を結ぶ並木道の軸線を強調する一方、西側では食堂の壁をアイストッップとする適度に囲われた緑の庭を生み出すことができた。アスファルト路面を車が埋めていた従前の殺風景な景観と比較するだけでも、この配置計画の妥当性がうなずける。今後、道路境界のフェンスを撤去する計画が実現すれば、3つの建物と周辺のオープンスペースは地域の人々にも一層親しまれるものとなるだろう。

建物の内部も機能的で美しい。大小合わせて 29 の教室を収容する単純な機能の施設だが、均質な教室の集合がもたらす単調さを救っているのが中央にある 4 層吹き抜けのアトリウムである。わずかな開角をもつ楔形平面は、授業の合間の短い時間に教室間を移動する学生の「流量」に対応すべくごく自然に導入されたとのことだが、アトリウム幅員の差異は又、吹き抜けを横切るブリッジや壁沿いに直登する階段などと相俟って、無性格な教室から出てくる学生に、自分が今いる場所を直感的に認知させるための有効なサインにもなっている。

吹き抜け部に並ぶ丸柱、要所に配されたアルコーブやブリッジ、平滑な壁面にテクスチャーを与える木製ルーバーなど、大きなスケールをブレイクダウンさせるデザイン上の配慮があり、アトリウム頂部のハイサイドライトも効果的だ。

審査の過程で、アトリウムの架構や列柱が装飾的に過ぎるといった評価やアプローチ動線の扱い方を疑問視する意見もあったが、総体的に見れば、計画の的確さと空間の心地よいスケール感が強く印象に残る秀作である。

(文責：大矢 二郎)

第 28 回 北海道建築賞審査員特別賞

中山 眞琴 君 「素材・尺度・光の変化による群としての空間設計手法の設計」

川と山を背にした朝里川温泉の一角に、旅館であることを示すサインも見当たらず、また表側に面して一切開口部も無く、それはまさに蔵が群れるようにして、ひっそりと寡黙に佇んでいる。その一見、おとなしくも人の到来を拒むかのような佇まいとアプローチとは、背後の川と山とを借景としつつ、内部に様々にかつ親密に空間を展開するための仕掛けであることにやがて気づくだろう。

細かく分節された各棟が庭を囲い込むようにして全体が構成されたその内部は、例えば客室や食事室の全室の仕上げが各々異なっており、また地窓や足元の間接照明等によって全体の重心が低く抑えられているものの、尺度に巧妙な強弱がつけられていることなど、素材・尺度・光を多様に変化させることによって、外部とは対照的に一種饒舌ともいえるほどに表現がなされている。全体を非対称にずらしつつ展開する構成、低く抑えられた尺度、主に素材による空間の多様な変化など、ここに見られる建築的特徴は、そのまま数寄屋の美学に繋がるものではある。しかし例えば、廊下壁面に裏使いで張られた杉材、石のようにサンドブラストされたコンクリートブロック、染色されルーバーとして用いられた MDF 材など、ローコストと工期短縮をにらんだ上での、素材の徹底した吟味と工法の選択等により、ここでは単なる洗練とは異なる空間的な密度と質を獲得することに成功しているように思われる。商業的空間としてのキッチンあるいは表層的な遊戯に陥る危険性を孕みながらも、その一歩手前で踏み止まっているかに見えるのは、多くの素材と手数をを用いながらも、作者はそれらを徹底して吟味しコントロールすることにより、安易な意味へと収束することを回避しているからに他ならない。このように考えると、プログラムや構成論等をベースとする設計手法とは異なり、素材や尺度という具体的なものを疑い吟味することを出発点として空間全体を構築しようとする、スイスをはじめとする現代建築の新たな流れのひとつが、この和風旅館という建築においても微妙に透けて見えてくるかのようである。

北海道の建築が、一般的な北海道という文脈との関係において表現される傾向がないとはいえないがゆえに、この試みと姿勢がことさら新鮮なものとして映るともいえそうである。

(文責：山田 深)